
俺が世界を変えてやる

ナイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が世界を変えてやる

【Nコード】

N6359Y

【作者名】

ナイン

【あらすじ】

人間が大嫌いな会社員、青野 空は神から特殊な能力を授かる。その能力で腐った世界の世直しを始める。

始まり

人間が大嫌い。

暴力、殺人、裏切り、自己中、身勝手、地球汚染など…。

だから人間が大嫌い。

兵庫県に住む会社員、青野^{あおの} 空^{そら}は人間の悲しい行動を見るたびに、自分の不甲斐なさを悔やむ。

空は県内の高校で送迎バスの運転手をしていた。朝は6時に高校に出勤し、バスの清掃から勤務は始まる。

清掃中に後部座席からはスナック菓子のゴミやペットボトルが無造作に捨てられている。タバコの吸い殻さえ落ちていることもあった。

それらを6時半までには綺麗に片付けて、7時には学校から一番遠いバス停に到着しておかなければならない。

バス停から生徒が乗車する際にあいさつなど言われたことがない。基本は無言だ。最近の子は本当に他人に興味がない。

学校に到着するとドアを開けるまで1人も腰を上げない。ドアを開けると無言で降りていく。

空は朝の仕事を終えた後、夕方の送迎時間まで一旦家に帰る。昼過ぎにまた出勤するのが空の毎日だ。

給料は安いけど誰とも話をしなくて良いところが空はこの仕事を気に入っていた。

一日の業務を終え、マイカーで帰宅途中にある光景を目にした。

自動販売機の前で4人の中学生が集まっていた。その中の1人が自動販売機の見本商品に向かって飛び蹴りを始めた。もちろん壊すつもりはないのだろうが、蹴りたいらしい。

残りの中学生は2人でもう1人の子の首を絞めている。さっきまで自動販売機を蹴っていた子は、歩道から車道に出て助走をつけて首を絞められていた子に飛び蹴りをくりだした。

いじめられている中学生の男の子は大きく咳をしながら地面にうずくまった。その光景を残りの中学生は腹を抱えて笑っている。

空はたまたま信号待ちでその一部始終を見ていた。それに気づいた1人の中学生が空の車の前に手を大きく広げて立ちはだかった。

「おい！何見とんねんボケ！降りてこいや！」

中学生相手にここまで舐められるなんて情けない。ただ、ここで車を降りて問題に発展したとき、損をするのは間違いなく自分だ。未成年なんて相手にするべきではない。

空はクラクションを鳴らし続けた。その行動に対し、前にいる中学生は車のボンネットに唾を吐き、暴言を吐きながら戻っていった。

悲しい…。なぜこんな生き物が地球上で一番繁殖してしまったのだろうか。人間は偉いのか？頭がいいのか？強いのか？

俺が神ならこの地球上を無に戻してやるのに。

その時、空のめったに鳴らない携帯電話が鳴った。

「ご当選おめでとございます。厳正なる抽選の結果、青野 空様がご当選されました。詳しくは、使いを向かわせましたのでご確認ください。」

何の抽選だろうか？空には覚えがなかった。何かの悪戯だろうと思っただけ後部座席に違和感を感じ振り返った。

そこには真っ白の猫がじつと空を見つめていた。

告白

真っ白の猫がじっと空を見つめていた。

「どっから入ってきたんだ!？」

周りを見渡すと後部座席の窓が全開になっていた。

「なんだ。ずっといたんだな。」

空は猫を追い出すため、車を道路の左脇に止めた。そして猫を捕まえようと振り返ると、その猫は微動だにせず、まっすぐと空を見つめていた。

猫の目は淡いブルーで瞬きもせず空を見ている。その姿に空の手が止まった。

「こんなに見つめられたのは久々だな。」

なんとなく居心地がよくなってきた空は、ずっと誰かに聞いてもらいたかった心の中に溜まっていた本心を話したくなった。

「あのさあ、さっきの中学生たちのこと、お前も見てたか？あれをいじめって言うんだ。でもやられてたやつ、その場から逃げなかったし笑ってただろ？あれは自分がいじめられてるって認めたくないからなんだ。あの子見てると自分の中学時代を思い出すよ。俺もあんな風にいじめられてたんだ。でも親とか周りにいじめられてるって思われたくなくて笑ってた。だからさっきの子と俺は同じってわけ。だからなんとかして助けてやろうと思ったんだ。だけど勇気が

なくってさ…、今の中学生って怖いだろ？自分がまだ未成年ってことを最大限に武器にして向かってくるし、結局は馬鹿を見るのは大人なんだ。悪事を正す正義の味方になるには荷が重いんだよな…。」

空の目にはジワリと涙があふれ出してきた。もう空は止まらない。

「そもそも俺は人と関わるのが嫌いなわけじゃないんだ。でも少し苦手かな。なんか俺って人から好かれたいんだ…、だから最初は良くてもだんだん青野 空っていう人間がわかってくるとみんな距離をとってくる。わかってる…俺にも問題はあるんだ。人に嫌われるのが怖いから楽しいふりをしていたから、上辺だけで付き合っていたから。でもやっぱりそんなの上手くいくわけないから…。今の仕事って2社目なんだ。前の会社では…。」

謎の猫はまるで人間の言葉がわかるかのようにジッと空の話を聞いている。

「前の会社では勤続年数が増すごと1人で過ごす時間が多くなっていったんだ。休憩時間でも自分から誰かに話しかけることもなくなつてさ、携帯とか操作もしてないのに見てるふりしてさ。自分は周りの奴らを見下したりもしてたっけ、誰かと一緒にいることで自分は人気者、友達が多くなってアピールしてるだけなんだろうってさ。だから俺はそんなくたらないことはしない。マイペースこそが男前だ！とかなんとか自分を納得させて…。誰からも相手にされなくて本当はさみしかったのかもしれない。俺も誰からも愛される存在になりたかったんだ。そんな存在に…：…ううう。」

とうとう声を出しながら空は泣き始めた。

「今の仕事ももう辞めたいんだ…。もっと毎日楽しくて、明るくて

愛のある職場で働きたいよ…。」

その時、猫の目から一滴の涙がこぼれた。驚いた空にさらに衝撃が訪れた。

「さぞ辛い人生を歩んできたんですね。私ももらい泣きをいたしました。」

聞き間違いではない。間違いなくこの猫から声がする。

「あいさつが遅れました。私、神の使いのグラスと申します。」

決意

間違いない。声はこの白い猫から発せられていた。この状況に対し、空は戸惑いながらもこのまま大変な状況に巻き込まれて人生が180°変わるんじゃないかという期待を抱き始めていた。しかしなかなか受け入れられるものでもない。

「すみません、驚かせちゃいましたね。無理もありません。私、このような姿をしておりますが、俗にいう悪魔です。」

悪魔？ってことは俺の人生はもう終わりなのか？いやいや、悪魔が俺のもとに来る理由がない。しかし、人間の言葉をこつとも上手に話されると信じたくなくなってしまう。空は車のエンジンを止め、不思議な猫と向き合った。

「俺にもわかるように説明してくれないか？君は何しに俺のもとへ来たんだ？」

「はて？失礼ですがメールはご覧になってはいらつしやらないのですか？先ほど、当選確認のメールを送らせていただいたのですが。」

メール？そういえば変なのが1件きてたな。悪戯メールだと思つて気にしてなかったけど…。何かの懸賞に応募した記憶もないし…。

「身に覚えがなくても仕方がないです。しかし、あなたは確かに応募されましたよ。正確に言うようお願いしたんですが。ちゃんとお金もいただきました。」

願った？しかも金を払ったって！？そんなバカな。

「確かに青野様は1月1日、5円を納めていただき、願いを応募されましたよ。」

それって…、初詣の時の賽銭か！確かについでの願い事をしたかもしれないけど…。何を願ったわけ？

「ところで青野様、先ほどの話を聞くと、とても苦勞なさってるんですね。この願いをもう5年連続で願われていたことも納得です。」

今のセリフで、俺の昔からの願いを思い出した。それは…。

「魔法が使えるようになりますように。」

そう。俺は魔法使いになりたかったんだ。今も…。本気で思った、超能力がありなら魔法もあるかもしれないと思ってた。だから、町の寂れた古本屋に行って故人が魔法について書いた書籍を探してみたり、こつそりゲームの攻撃魔法を連呼したりしてた。都市伝説ではあったが40歳まで童貞なら魔法使いになれるっていう説も考えた。しかし女体の誘惑には勝てず、20歳で断念した。その魔法が使えるようになるっていうのか！？

「魔法の使い方なのですが、先ほどのご当選メールのアドレスに願いを書いて送信していただくと、その内容が現実となります。」

要するに俺はこの携帯を使って何でも願いを叶えることが出来るということか、最高じゃないか！俺の意のままだ。

「注意点なのですが、青野様が願いを送信したとき、すぐに返信メ

ールが届きます。そこには時間が書いてありまして、その時間の分だけ青野様の寿命が短くなりますのでご注意ください。」

「えっ!?!」

やっぱり上手すぎる話なんてあるはずがないよな。願いを叶える代償を払えってことか。

「願いは青野様の寿命が続く限りどんなことでも叶います。しかし、罪のない人を傷つける内容や、願いの規模が大きくなるほど寿命も一気に短くなりますのでご注意ください。そして1度送信されたメールは取り消すこともできません。」

この話を聞いていて俺の頭の中にある思いが生まれた。私利私欲のためにも使ってみたいが、どうせならこの腐った世界を俺の力で変えられないだろうか？俺の寿命はあと何年残っているのだろうか…。どこまでやれるかわからないが俺の命1つで、どこまで変化させられるか見てみたい。

俺が世界を変えてやる!!

実験

「では、私はこれにて失礼します。」

紳士の猫は丁寧にお辞儀をしてこの場から去ろうとしていた。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！まだ教えてほしいことが山ほどあるんだ！！まず、俺の寿命を代償に願いを叶えるってところだが、1つの願いでどれくらい寿命が短くなるんだ！？」

グラスはあからさまに困った顔をして教えてくれた。

「たとえばその小石を動かすなどの願いはだいたい1秒ほどです。私は神から、ご当選の報告だけしてすぐに戻れと言われておりますのでこれにて失礼します。」

グラスは車の窓から車内に飛び出した。

「待ってくれ！！じゃあ最後にもう1つだけ！！俺の寿命は後あと何年なんだ！？」

グラスはニヤツと笑って去って行った。残念……。取り残された俺は1人で仕方なく今後の身の振りを考えた。今の仕事が辞めれると思うと自然と笑みがこぼれる。毎日苦痛だったし明日にでも上司に話してみよう。

しかし、まずはこの力を試してみたい、そう思ったとき2人組の女子高生が俺の車の前を楽しそうに横切って行った。そうだ！

俺は『スカートめくれろ』と書き、あのアドレスに送信してみた。すると2人の女子高生のスカートだけでなく、空の視界に入るすべてのスカートが前ぶれもなくいきなりめくり上がった。

たちまちところどころから聞こえる悲鳴、目のやり場に困る男性たちで溢れかえった。空の目の前にいる女子高生達も10代らしからぬ過激な下着を必死に隠そうとしていた。

メールを打つ際に固有名詞を入れないと、空の視界に入る全てがその対象物になるのかもしれない。その時、空の携帯が鳴った。

『20時間』

えっ!!??20時間で…、一気に減りすぎだろう!初めの実験にしては代償が大きい…。やってしまった。確かにグラスは罪のない人を傷つけたのかもしれないが…。よく考えて送らないとすぐに死んでしまうな。

まあ時間だけはたっぷりあるんだ、ゆっくりやろう。

空は自分が帰宅途中であることを思い出した。晩飯、どうしようかな…。空は車をここから1番近いコンビニに走らせた。そこにはさっきの中学生4人組が店の前で迷惑も考えずバカ騒ぎをしていた。

天罰

中学生たちは4人で集まって何かをひそひそと話をしている。その後、1人が大声でゲラゲラと笑いながら、さつき首を絞められていた子の背中をドンと押した。いじめられっ子はそのままコンビニに入ってしまった。

残りの3人の中学生はガラス越しに店内の様子をうかがっている。中に入りたいじめられっ子は周りの目を気にしながら雑誌コーナーに移動していった。そこで少年雑誌を読みだした。

いや、雑誌は読んでいない。読むふりをしながら目はエロ本コーナーに向けられていた。なるほど、エロ本でも買って来いと言われたのだろう。中学生の考えそうないじめだ。

いじめられっ子は店員や周りに人がいないことを確認すると、1番手前にあったエロ本を素早くカバンの中にした。

…おいおい、それはまずいんじゃないのかい？この場合、店内に入って止めるのは簡単だがそれでは罰せられるのはいじめられっ子だ。たしかに万引きをした本人も悪いのだが彼も被害者だろう。

しかし、このまま見逃すわけにもいかない。どうしたものか…。

その時、店内の奥から店長らしき人が出てきて、いじめられっ子を呼び止めた。どうやら防犯カメラで万引き現場を撮られていたらしい。そのまま彼は奥に連れられて行った。

店の外で見ていた3人は腹を抱えて笑っている。携帯を取り出して

連行される姿をカメラで撮ったりしていた。

こういう奴等は徹底的に懲らしめてやる。今までなら関わっても自分自身が損をするだけだったので、見て見ぬふりをしてきたが今日からは違う。さて、どうしたものか。

空はこのクズ3人にどんな天罰を与えようか考えることが楽しくてたまらなかった。まさに自分が神になった感覚だった。

しかし、メールを打つ前に気づかれた。中学生の1人が偉そうに笑いながら近づいてくる。さっきの時に顔を覚えられていたのだろう。

早く、早くメールを打たないと！！

ドーン！車のフロントガラスに汚い顔をべったりつけてきた。俺はすぐにメールを送信し、ドアを開けた。

「お前さっきのやつやんな？殺したるわ。」簡単に殺すとか言ってるよ。情けない。

俺はポケットからある物を取り出し、彼らに反撃した。

「非番だったから見逃してやろうと思ったが…、駄目だな。兵庫県警の青野だ！自動販売機の器物破損および窃盗罪で連行する。」

俺は『俺のポケットには警察手帳が入ってある。』と送信していた。これには効果覿面だったようで、中学生はおもしろいように絶句している。

「まずお前たちの名前と住所、中学校名を教えなさい。」

彼らは下を向いて黙っている。彼らにとって大人とは自分達より下の存在だと思っていたのだろう。しかし、国家権力の前にはひれ伏すしかないのだ。クズどもにはいい薬だ！大人をなめるなよ！

「さつさと言え！全員停学は免れない。おまえたちの将来も、もう終わったな。」

気持ちいい、最高に気持ちいい。しかし、本物の警官でもないので、連行も補導もできないのだ。そろそろ潮時だろう。

「ただまあ、俺は今日分がいいんだ。器物破損の件は見逃してやる。だが、お前らも万引きしたのと変わりはない。同罪だ！それことについては見逃すわけにはいかない。」

空は3人を店内に連れて行き、バイトの店員に警察手帳を示し、事情を説明した。バイト君はすぐに店長を呼んできた。そして3人も店内の奥に連れられて行った。

最高。あいつらの顔といたらなかったな。まあ万引きしたいじめられっ子は少し同情するが、言いなりに万引きをしてしまった弱い本人自身も罪はある。

これで各々少しは反省してくれればいいのだが……。これが俺流の世直しだ！その心の中でガッツポーズを決めたとき、メールの存在を思い出した。

案の定、受信メールが1件新着で来ていた。そこにはこう書いてあった。

タバコ

今日、空は覚悟を決めていた、会社を辞めよう。

空は県内きつての進学校で送迎バスの運転手をしていた。その通う生徒は頭があるが心がない。あいさつもしない、車内にゴミは捨てる。自分さえよければそれでいい。こういう子がいい大学に入つて公務員になったり政治家になる、そして日本を創る…。今の日本に至るつてわけだ。

さっさとこんな環境からオサラバしたいのだ。ただ、空にも社会人としての責任は果たさなければいけない。「今日から仕事辞めます」「なんて無責任なこと出来ない。とりあえず今日は上司に辞表だけでも渡しておいて辞めるのは来月からだ。」

6時に会社に着いた。さっさと清掃業務を終わらせて初めのバス停に向かった。この仕事ももうすぐ辞めれると思うと、気が楽になる。ルンルン気分で少しバスを飛ばしすぎたせいかバス停には10分ほど早く着いた。バスを道路の左端に寄せて生徒が乗車してくるのを待った。

5分ほど待っていたら、1人の生徒が歩いてくるのが見えた。その生徒はバスが視界に入ると少し驚いた顔をしていた。いつもは7時ちょうどにバス停に着くのでまだ来てないと思ったらしい。

その男子学生は何かを道に捨て、ダルそうにバスに近づいてきた。空はその捨てた何かをすぐに理解した。タバコだ。

空は以前に1度だけこの学生にタバコに対して注意したことがあった。しかし、聞く耳を持たず、「学校にチクったら殺す」と脅された。それ以来この生徒には関わらないようにしていた。

どこかで見つかつて補導でもされればいいものを。

空はタバコは吸わない。毒以外の何物でもなく、環境破壊に繋がるから嫌いなのだ。ただ、吸ってる人に対して偏見を持っているわけでもない。吸いたい人は吸えばいい。

だが、タバコを道路にポイ捨てだけは許せない。特に車からのポイ捨ては悪意がある。この男子学生も、タバコを吸うことには何も思わない。身体が出来上がってないうちに吸った代償として寿命を縮めるのは本人の自由なのだから。ただ、タバコの副流煙で周りに迷惑をかけることも知っていてほしいものだが…。

空はすぐに携帯を取り出してメールを打った。『目の前の学生が捨てたタバコ カバンの中に戻る』

そして、空はすぐにバスの扉を閉めた。

男子学生は扉の前に立つてもバスの扉が開かないのでイライラしている。「早く開けるや!」

そう男子学生が怒鳴ったとき、持っていたカバンから黒い煙が上がったかと思うと一気に燃え出した。

熱い!!と車外からかすかに聞こえるが、空は気づかないふりをする。火のついたタバコを捨てた本人が悪いのだ。それが原因で家をなくす人だって少なくない。

火は学生の制服に燃え移り、地面をのた打ち回っている。だんだん現場は騒然としてきた。さすがに空も危険を感じたので、もう1つ急いでメールを打った。『目の前の学生の火 消える』

その瞬間、一気に火が消えた。学生は制服の背中部分は完全に燃えていた。隙間から見える肌は大やけどを負っていた。

すぐさま救急車を呼んで、待つ間に学校に連絡をした。男子学生の様子を見に行くと、ヒューヒューと泣きながらうずくまっていた。

弱り切った学生に対して空は声をかけた。

「バーカ。」

どうせタバコが原因だから誰にも言えないだろう。自分の背中を見るたびに思い出すだろう、やけどは一生残るのだから。

空に2件のメールが来ていた。

『 30分』

『 5分』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6359y/>

俺が世界を変えてやる

2011年11月26日00時57分発行